

第一章 古代人の行動から古代の地形を推理する

..... 私たちが現在知っている近江から東に向かう「東海道五十三次」は江戸時代に整備された「街道」であって、都が奈良にあった時代の「東海道」ではなく、古代の奈良から東国に向かう「東海道」は、陸路ではなく船で海岸沿いに移動し、三浦半島から房総半島に渡っていたようです。というのは、地名の「上・下」は都に近い方が「上」のはずですが、房総半島では陸路なら奈良・京都に近いはずの北部が「下総」で、その南が「上総」になっているのです。これは、都からまず上総に着き、そこから下総に向かったということを示しており、陸路ではこういうルートは辿れないからです。「東海道」は、三浦半島から東京湾を横断して房総半島の上総に渡り、そこから房総半島沿いに東京湾を北上して下総へ向かったから、総国の南が「上総」で北が「下総」なのでしょう。

..... 各国府への幹線道路として造られた**北陸道、東山道、東海道、山陽道、山陰道、南海道、西海道**の七道のうち、**東海道、南海道、西海道**は船を使う海の道だったから「海道」なのです。

..... 古代の奈良に海があったということが確信となり、それを実際に確かめてみたいと考えだした頃、「平城遷都一三〇〇年記念」として国土地理院が作った「集成図奈良セット」の地図※

※引用者：これです⇒<http://www.gsi.go.jp/common/000055329.pdf> <クリックしてください>

を目にしました。それには六〇〇〇年前の地図がついており、奈良盆地は大きな湖になっていました。それでは、奈良盆地は海ではなく湖だったのでしょうか？でも、周辺の山からの流入でできた湖であったなら、それほど大きな湖が完全に消えてしまうはずがありません。そのことに疑問を持って調べているうちに、現在の河内平野は古代には海だったこと、やがてその海が堆積物によって上町台地の先の方で遮断されていき、流入する川の水によって淡水化して河内湖になっていったこと、その後、海の後退に従って河内湖の水面も下がり、川から流入する土砂が堆積して湿地化していき、江戸時代には一部が池や沼として残っていたが干拓によって水田となったこと、古代の奈良盆地は大和川の流れる谷でこの河内の海に繋がっていたことが分かってきました。この**山に囲まれた湖のような、奈良盆地を満たしていた内海は、木津川・淀川・大和川で河内や京都南部にあった巨椋池おぐらのいけの海に繋がっており、また、宇治川（瀬田川）で琵琶湖や近江にも繋がっていました。琵琶湖の北端からは五里半越（塩津街道）で一山越えれば日本海ですから、古代の奈良は、河内の海や琵琶湖に繋がり、水路を通じて日本国中、さらに朝鮮半島や中国にも繋がっていた、日本列島の中心にあって最も船の便の良い海辺の町だったのです。だからこそ、古代から明治維新まで日本の都はずっと奈良・京都に置かれていたのでしょう。**

..... 「奈良盆地は古代には海だった」.....。司馬遼太郎著『街道をゆく・奈良散歩』には「奈良には磯くさい地名が多い」と書かれていましたが、磯くさい地名が多いのは、本当に磯だったからなのです。地名は、地形の特徴から付けられていることが多く、富士山の見えない所に「富士見」が無いように、海の無い所に磯くさい地名が多く付けられるということも無いのです.....。

第二章 卑弥呼の時代の中国と朝鮮半島から、邪馬台国を推理する

..... 朝鮮半島の南西部にあった馬韓（後の百済）からは、地図で見ると済州島を経て南東に向かえば九州の西側から南の方に着くようです。鹿児島島の坊津は古くから明や清や琉球の商船を迎える交易港であって、かつてはここから遣明船が出入りしており、倭寇の本拠地や海賊の根城としても知られていました。このルートは古代から日本と中国・朝鮮とを結ぶ航路だったのです。また、地質から見ると、北九州は縄文時代に起きた鬼界カルデラの大噴火による火山灰の影響が少なく、水田耕作に向いていた上地だったのに対し、中部から南部にかけては火山灰が厚く積もり、水田には向かない土地だったようです。これらの地理的条件から考えると、北九州のクニグニは、朝鮮南部の加羅系の人々のつくっていたクニであり、南九州にあったという**狗奴国は、騎馬民族であった百済系の人々のつくっていたクニ**だったようです。**天孫降臨が南九州とされているのは、この百済系の人々が南九州に渡来してきたから**

のでしょう。

その後、それらのたくさんの部族小国家の中で、南九州にあった狗奴国が先住民の隼人族を婚姻関係によって取り込んで勢力を広げていき、北九州のクニグニを脅かすようになっていったようです。この、婚姻によって隼人族を取り込んでいった経緯は、『古事記』に「山幸彦・海幸彦」の物語として語られています。『古事記』の日向神話は、狗奴国をつくった天津族が大和朝廷を開くまでの天津族の歴史を神話の形で語っているのです。南九州から九州全域へと勢力を広げようとする狗奴国の侵攻に対抗するために、北九州にあった三十ほどの部族国家が卑弥呼を盟主として連合しましたが、それでも狗奴国に対抗することができなかつたようで、盟主となった卑弥呼は中国（この頃は後漢が滅亡して三国時代）の魏に朝貢し、その属領となって魏を後ろ盾とすることで狗奴国を牽制しようとした。朝貢国になるということは、魏の属領となって、貢物を納める見返りに魏の保護を受けるということなのです……。

第三章 「古事記」の語る神話と実際の歴史の関係を推理する

三 「高天原神話」と狗奴国

……邪馬台国を滅ぼした狗奴国は、朝鮮半島南部で三韓（馬韓・辰韓・弁韓）時代に多くの部族国家が林立し勢力争いを繰り返していた頃に、半島の南西部にあった**馬韓（後の百済）から南九州に渡来してきた人々によってつくられた部族国家であり、天津族とはこの国をつくっていた百済系の人々のこと**のようです。この天津族の支配を正当化する『古事記』の「天孫降臨神話」では、アマテラスは高天原からタケミカヅチを送って出雲にいた葦原中国あしはらのなかつくにの王・大国主に国譲りをさせ、その後で天孫・ニギノミコトを降臨させたとしていますが、その天孫が降臨したのは、譲らせたはずの出雲の葦原中国ではなく、そこまでの話には全く登場していない南九州であり、降臨してから島根へ行ったわけでもありません。それはなぜか？**降臨の場所を南九州としたのは、実際に天津族が渡来してきて最初に国をつくったのは出雲の葦原中国ではなく、南九州だったからであり、降臨後、島根へ向かわなかつたのは譲らせたという葦原中国は、島根にはなかつたからです。天津族が実際に向かったのは島根ではなく「ヤマト」でした。**記紀の記述の不審で整合性の無い部分は、このように再編して時代や場所を動かしたり、つじつまを合わせるために話を創ったりした部分で、そういうところにはこういう齟齬そこがあちこちにみられるのです。

……南九州にやって来た天津族は、先住民族であった隼人族をその首長の娘との結婚などによって取り込み、日向を拠点として勢力を広げていったようです。鹿児島島の坊津は古くから貿易船や海賊船の港となっていた所です。**潮流に乗って薩摩半島に着いた天津族**は、まず、薩摩の阿多（薩摩）隼人を取り込みました。その経緯は、降臨したニギノミコトは笠沙でオオヤマツミノカミの娘・コノハナサクヤビメと結婚したという形で記されています。このヒメの別名は「神阿多都比売かむあたとひめ」つまり阿多隼人の首長の娘です。ニギの次の世代では大隅半島の大隅隼人を取り込みました。この経緯は山幸彦・海幸彦の神話として記されています。失くした釣針を捜しに山幸彦（ホオリノミコト）が行ったワタツミの神の宮殿「わたつみのいるこの宮」は、海の中の宮殿ではありません。山幸彦は潮に乗って舟でワタツミの神の宮殿に行ったのであり、その宮殿の門の脇には井戸があって、桂の木が生えていたのです。これが海の中にある宮殿の描写のほずがありませんし、海の中に在ったと書いてあるわけでもなく、海の中にあつたと信じているのは、絵本やお話ですり込まれた思い込みなのです。ワタツミの神の宮は、大隅半島にあり、その宮に住んでいたワタツミの神とは、先住の大隅隼人の首長であつて、天津族の山幸彦（ホオリノミコト）は塩椎神（シオツチノカミ）の助言を受けて大隅隼人を訪ね、その首長の娘のトヨタマビメと結婚したのです。

……「天降り」とはつまり日向から来たことなのです。

……隼人族を取り込み、南九州を支配していた狗奴国は、三世紀の神武の代になって、九州全土を支配下に置くために、神武四十五歳の時に日向を発って、邪馬台国をはじめたくさんの加羅系の小部族国家があつた北九州に向かつたようです。三世紀頃に北九州のクニグニが卑弥呼を盟主に立てて連合を組んだのは狗奴国の侵攻に対抗するためだつたと思われまふ。『魏志倭人伝』に「二四七年頃、倭国内乱が起き1000余人が死んだ」とあるのは、この頃に狗奴国との大きな戦いがあつたということではないでしょうか。

四 「神武の東征」と九州統一王朝

・・・・・・その間に中国では二六五年に魏が滅びて、西晋が興り、邪馬台国連合では、魏に朝貢していた卑弥呼が二四七年頃に死去しました。内乱の後、連合の盟主に立てられた奝とは、魏の後に興った西晋に二六六年に朝貢してその庇護を頼みますが、その甲斐もなく邪馬台国連合は狗奴国に滅ぼされてしまい、神武は大宰府に九州統一王朝の朝廷を開いたようです。これは、大宰府がずっと後まで「遠つ朝廷^{みかど}・遠の朝廷」と呼ばれていたことから推測できます。天皇家と天津族は、大宰府を最初に朝廷を置いた本貫の地の一つとして大切にしていたのです。邪馬台国を滅ぼして九州を統一したほどの勢力を持っていたはずの狗奴国がこの後全く歴史に登場してこないのは、この国がいつの間にか衰えて消えてしまったからではなく、九州統一王朝として力を蓄えた後に東征して河内王朝となり、ヤマト王朝へと発展していったからです。記紀は東征を全て神武の事績としていますが、三世紀に四十五歳で始めた統一事業を神武一代で成し遂げられたはずはありません。三世紀に日向を発って大宰府に九州統一王朝を開いたのが神武であり、大和への東征を開始したのは、その子孫である四世紀後半の崇神なのですが、神武が日向から直接東征をしたと記すことで、河内（ヤマト）王朝の前身が狗奴国であり、中国の朝貢国だった邪馬台国を滅ぼして発展した王朝であることを記紀は慎重に隠したのです。

五 「万世一系」と記紀が隠した王統の交代

神武が九州統一王朝の開祖だったことは、その諡号から推測することができます。**歴代の天皇の中で諡号に「神」の文字が使われているのは三人だけであり、諡号の「神」は王朝を開いた「祖」だけに贈られています。その一人目は三世紀に九州で統一王朝を開いた神武、二人目はその子孫で、四世紀に東征して河内王朝を開いた崇神、そして三人目は五世紀後半に初めてヤマトに入り忍坂に宮を置いて大和朝廷を開いた応神です・・・・・・。**

第六章 伝承と神社と祭神から、古代史を考える

・・・・・・**出雲神話の「国譲り」とは、実際には四世紀後半の天津族の東征による大和征服のこと・・・・・・。**

第七章 大国主の「国譲り」とは？ タケミナカタノミコトとは？

・・・・・・「国譲りと天孫降臨神話」が示唆しているのは、天津族が南九州に渡来して狗奴国をつくり、勢力を広げていって九州統一王朝をつくった頃、本州には「葦原中国の大国主」を大王とする国が成立していたということであり、大国主は林立していた多くの部族国家のそれぞれの部族長（王）の上に立つ「大王」だったということです。それが「大国主」という名前の意味であり、だから、「大国主に国を譲らせる」ことが大国主の傘下にあった全ての部族国家を従えるということになったのです・・・・・・。

・・・・・・現代語訳されている『古事記』の出雲神話は、矛盾だらけの荒唐無稽な「お話」であり、この中に何らかの歴史的事実などあるわけがないと思ってしまうのですが、出雲神話は、『古事記』全体の三分之一を占めるほどの分量で記されているのです。それは、この神話が歴史から落とすことのできない重要な部分だけれどはつきりと記すわけにもいかないから「騙った」のだということであり、ただ単に意味も無く挿入した面白おかしい荒唐無稽な「作り話」ではないということを示しています。訳の分からないおかしな話になってしまっているのは、現代語訳や解釈が偏られた歴史を正しく読み解いていないということではないでしょうか・・・・・・。

第八章 タケミナカタは大国主の息子なのか？

・・・・・・諏訪大社・上社を七十六代にわたって「神長官^{じんちょうかん}」として司ってきたのが守矢氏であり、・・・・・・長きにわたって神長官家に伝えられてきた「もの」は、現在諏訪大社上社の本宮の近くにある「神長官・守矢資料館」に展示されています。そして、七十八代の守矢早苗氏は、展示することのできない神長官家に伝えられてきた「こと」を「神長官・守矢資料館のしおり」として残されています。・・・・・・このしおりの「漏失もりや神からの生命のつらなり」には、諏訪には、『古事記』に書かれた国譲り神話とは別の国譲り神話の伝承があると書かれています。その部分から簡単に引用しておきます。

大和朝廷の統一以前、出雲系の稲作民族を率いたタケミナカタがこの盆地に侵入し、この地に以前から暮らしていた漏矢神を長とする先住民族が天竜川河口に陣取って迎え撃った。タケミナカタは手に藤の蔓^{つる}を、モリヤ神は手に鉄の輪^{かぎ}を掲げて戦ったが、モリヤ神が負けてしまった。その時のタケミナカタの陣の跡には藤島明神（岡谷市川岸

三沢)が、モリヤ神の陣の跡には漏矢大明神(岡谷市川岸橋原)が天竜川を挟んで対岸に祀られており、この漏矢神が守矢家の祖先神であると伝えられている。この、出雲から侵入したタケミナカタは諏訪大明神となりノ諏訪大社の始まりとなった。こうして諏訪の地は中央とつながり、稲作以後の新しい時代を生きていくことになったが、**先住民モリヤの人々は侵入者・出雲系の人々に虐げられたわけではなかった。タケミナカタの子孫・諏訪氏が大祝おほほうりという生神の位に就き、漏矢神の子孫の守矢氏が神長じんちょうという筆頭神官の位に就き、この地の信仰と政治の実権は守矢氏が待ち続けたと考えられる。**こうして大祝と神長いによる新しい体制が固まり、この信仰と政治の一体化した諏訪祭政体は古代から中世へと続いた。

この、先住民モリヤの人々とは、「出雲から稲作を持ち込んできたタケミナカタと出雲族」よりも早くから諏訪に住んでいた、ミナカタトミノカミを祖とする、狩猟を主としていた人たちだったようです。……タケミナカタが藤蔓を掲げ、モリヤ神が鉄の輪を掲げて戦ったという伝承は、**稲作文化を持つ民と、狩猟文化を持つ先住民の戦い**だったことを伝えているのではないのでしょうか。

……タケミナカタと記されている人物は、二人いたのだということをはっきりさせるために、スサノオの息子のヤシマジヌミを「タケミナカタA」、スサノオの七世の孫を「タケミナカタB」と書くことにします。守矢家の伝承は、スサノオの息子の「タケミナカタA」は稲作を持って出雲から諏訪へ進出して来、諏訪や佐久に稲作を広めたと伝えていますが、その進出は**征服して全てを自分のものにするためではなく、連合し共存するため**だったように思われます。というのは、侵入されたと思った先住のモリヤの人々は、天竜川を挟んでタケミナカタと戦い負けてしまったわけですが、勝ったタケミナカタは、モリヤ神を殺し、国を奪って諏訪の支配者になったわけではないからです。しおりには、「**モリヤ神は負けたが、信仰と政治の実権は握り続けた**」とありますから、モリヤ神は「タケミナカタA」を「神(支配者)」として受け入れたが、実際の支配は引き続きモリヤ神が行い、祖廟も祀り続けていたということでしょう。これはモリヤ神を始め諏訪の長者たちが「タケミナカタA」を服主としてその傘下に入ったということを示唆しているようです。……このしおりの中で守矢早苗氏は、タケミナカタの侵入により諏訪の地は中央と繋がったと記されていますが、この出来事はヤマト朝廷成立のはるか以前の、稲作が日本に持ち込まれ広がっていった頃のことですから、繋がった相手は天津族やヤマト朝廷ではなく、出雲族だったということになります。また、**稲作を持ち込んだタケミナカタがモリヤの人々の土地を奪わなかった(虐げなかった)のは、狩猟を主とするモリヤの人々が住んでいた標高九〇〇m以上の段丘の下方に、天竜川からの流出で諏訪湖の水位が下がり始めていたために広大な稲作に適した湿地(諏訪盆地)が出現していたから**でしょう。「タケミナカタA」と守矢神が天竜川を挟んで戦ったという伝承から、「タケミナカタA」が諏訪にやって来た頃には、すでに天竜川の流出口ができており、諏訪湖の水位が下がっていたことが分かります。諏訪では、諏訪の先住民と稲作を持ってやって来た出雲族との間での土地の奪い合いは無く、出現していた広大な湿地を利用した稲作によって安定した食料を得られるようになり、大きな力を蓄えることができたと思われまふ……。

第十章 アマテラスと争ったスサノオとは？

……記紀は「国生み神話」で、弥生人が先住の縄文人から奪って自分達のものとしていった土地(国)を「**イザナギ・イザナミが子を産んだ**」と表現しているのです。

その部分は『日本書紀』では、

産む時に至るに及びて、先づ淡路洲あはじのしまを以て抱えとす。意みこころに快びざる所なり。故、名けて淡路州と曰ふ。廼すなわち大日本おほやまと日本、此をば耶麻騰やまとと云ふ。下皆しもみな此に効ならへ。豊秋津洲とよあきずしまを生む。次に伊予二名洲いよふたなのしまを生む。次に筑紫洲つくしのしまを生む。次に億岐洲おきのしまと佐度洲さどのしまとを双生ふたごにうむ。世人よひと、或いは双生むこと有るは、此に象かととりてなり。次に越洲こしのしまを生む。次に大州おおしまを生む。次に吉備子洲きびのこしまを生む。是に由りて、始めて大八洲国おおやしまのくにの号起なおこれり。即ち対馬嶋つしま、壱岐嶋いきしま、及び処処ところどころの小嶋をしまは、皆是潮の沫あわの凝りて成れるものなり。亦は、水の沫の凝りて成れるとも日ふ。

ら出て復活したことになっていますが、これ以降アマテラスが主役として登場することはなく、主導権はタカミムスヒに移っていますから、岩屋戸隠れは卑弥呼の死と、その後北九州の主導権が天津族に移ったことを示唆しているように思われます。復活したと書いた都合上、天孫降臨にも神武の東征にもアマテラスを登場させてはいますが名前だけであり、前項で書いたように主導権を待ち、全てを決定していたのは天津族の「本当の皇祖・みおや」であるタカミムスヒノカミなのです。そして、アマテラス（卑弥呼）の話は、この岩屋戸隠れ（卑弥呼の死去）で終わり、『古事記』の舞台は日向の天津族の話へと移っていきます。『日本書紀』にはアマテラスは全く登場しないのですが、『古事記』では、ここまでの部分にタカミムスヒは登場せず、「高天原神話」はアマテラスとスサノオの間の出来事として記されています。……北九州を攻めたスサノオは、邪馬台国の連合軍の反撃にあって敗れ、北九州から追われて島根の出雲へ行き、そこに定着して勢力を広げていったようです。「神」と記されていますから、出雲の支配者になったのでしょう。そしてここから話は突然に、スサノオの六代の孫で四つの別名を持つという大国主を主人公とした、「高天原神話」とは全く無関係に見える「出雲神話」へと移ってしまうのです。

……卑弥呼と壱与の時代の倭国王として『日本書紀』が創った「神功皇后」は二七〇年まで在位したとされていますから、壱与が亡くなったのは二七〇年頃と思われます。この頃に、邪馬台国は狗奴国に滅ぼされたようです。このアマテラスを引き出すことに成功し、「高天原と葦原中国は再び明るくなった」という記述が示唆しているのは、狗奴国が勝利したということのようです。邪馬台国連合は、卑弥呼の死後すぐに狗奴国に滅ぼされたのではなく、一〇〇〇人が死んだ内乱の後壱与が盟主に立てられ、その壱与は二六六年に西晋に朝貢使を送っていますから、岩屋戸隠れの後、合議してスサノオを罰し、追放した神々とは、狗奴国ではなく邪馬台国連合の神々であり、連合軍がスサノオを撃退したということなのでしょう。この時（卑弥呼が死んだ二四八年頃）は、北からのスサノオの侵攻を退けることができたけれど、その後、南から侵攻してきた狗奴国によって二七〇年頃には滅ぼされてしまったということのようです。けれども、北九州で敗退したスサノオは、この後追われていった島根の出雲で国津神の娘クシナダヒメと結婚し、子孫を増やして出雲に大きく根を張り勢力を広げていたのです。『古事記』は、**天孫降臨後の天津族の歴史を「日向神話・神武の東征神話」として、同じ頃の本州でのスサノオと出雲族の歴史を、「出雲神話」として記している**ようです。

それでは三世紀に出雲で大きな勢力をつくっていったスサノオとは、どこからやって来たどんな人だったのでしょうか。それを考えるヒントは、『日本書紀』の一書に残されていました。『日本書紀』の一書には、スサノオは高天原から新羅の曾尸茂梨そしもりに降り、そこから息子の五十猛命いそたけるのみことと共に出雲へやって来たことと記されていますが、「新羅」が国号となったのは五〇三年であり、『古事記』の記す神代にも、二〇〇～二五〇年頃（卑弥呼の頃）にも、まだ存在していませんから、スサノオが新羅に降れるはずはありません。ここは「新羅の曾尸茂梨に」ではなく、「(新羅の前身である)辰韓十二カ国の一つにあった曾尸茂梨に」とするべきだったのです。「新羅の」と書いてしまったのは、一書が書かれたのが新羅の建国後のことで、その当時曾尸茂梨は新羅にあったからなのでしょう。新羅の曾尸茂梨に降ったというのは、二〇〇～二五〇年頃の辰韓で十二の部族国家がせめぎ合い戦いを繰り返していた過程で、スサノオが息子と共に朝鮮半島を離れ、曾尸茂梨から日本に向かったということでしょう。その時**スサノオが率いてきた人たちが「出雲族」と呼ばれるようになった人たち**のようです。ソシモリは、古代朝鮮語ではソシ=牛(の)モリ=頭であることから、牛頭山のこのように、……スサノオは、二～三世紀頃に、朝鮮半島の南東部の辰韓にあった十二の部族国家の中の、牛頭山辺りの部族から出て日本に向かった実在の人物のようです。曾尸茂梨を降ったスサノオと出雲族は、北九州へ向かったようですが、ここにはすでにたくさんの部族国家がひしめいていて上陸する余地はなく、邪馬台国連合によって撃退されてしまったため、島根に上陸したようです……。

第十一章 葦原中国を推理する

……**出雲神話**は島根という一地方での話ではなく、「日向神話」が九州での天津族の発展と九州統一の過程の歴史を語っているのと対になる、同時代の本州における出雲族の発展の過程を記した歴史であり、日向神話の後半の**神武東征は、その二つの勢力がぶつかり、天津族の狗奴国が大国主の出雲族の国を倒して統一国家をつくって**いっ

た四世紀の後半から五世紀初めにかけての歴史を記しているのです・・・・。

・・・・葦原中国あしはらのなかつくにとは、古代の海が退きはじめて海面が下がった跡の干潟や湿地に一面に葦が生い茂っていた日本列島の、中央にあった国を表す言葉のようです。列島の縁に位置する島根ではなく、弥生人が征服し自分たちの物とした九州から関東までの中央にあり、水路を通じて日本国中のみならず世界にも繋がっていて、もっとも交通や物流の便の良い地であり、内海に面した穏やかで安全で豊かだったヤマトの位置を指す言葉であって、『古事記』の記した葦原中国は、島根ではなくヤマトにあったのです。四世紀末の天津族の東征の当時、奈良は「大和の国」ではなく、出雲族の住む「出雲の国」であり、律令制下で国が再編された時に島根が「出雲国」、出雲族の国だったここは、「大和国」と名付けられたのです。そして、ここが「ヤマト国」とされた理由は、前述のように「ヤマトとは邪馬台国のことである」と中国に信じさせるためです。『古事記』はこの地を「葦原中国」と記し、島根を「出雲国」と名付けて杵築に出雲大社を造り、島根の地名に神話にちなむ「故事つけ」をして、葦原中国であり出雲国だった奈良を「大和国」と名付けることで、天津族が征服した出雲の国はヤマトにあったことを隠し、島根にあったと思わせたのです。

・・・・出雲族が移動していった住んだ所には、「出雲」という地名とスサノオを祀る祖廟・熊野神社が残されているようですが、「出雲」は島根にも、木の国（紀伊国）にも、京都にも、奈良にもあります。今、「奈良の出雲」は脇本から長谷へ向かう伊勢街道沿いの一地区の地名になっていますが、それは天津族の東征によって葦原中国（出雲）の大国主・ナガスネビコが殺されて国が滅んだ後、出雲族がヤマトの中心部を追われてここに移されたからで、滅ぼされる以前の、大国主が君臨し出雲族の住む国だった頃のヤマトは、全体が「出雲族の国」だったのであり、『古事記』の「出雲神話」は、出雲国の始祖・スサノオが朝鮮半島の牛頭山から息子と共に日本にやって来た時から、その六世の孫の大国主が殺されて葦原中国が天津族に征服されるまでの出雲族の歴史を記しているのです。「国譲り神話」と「神武の東征神話」は、この「ヤマトの出雲」での四世紀の終わりから五世紀の初めにかけての「葦原中国の大国主・ナガスネビコ」と「狗奴国の王・崇神」の戦いのことであり、『古事記』は1000年水増しした歴史の空白を埋めるために、同じ歴史上の出来事を何度も繰り返し設定を変えて書いたために実際の歴史との間に混乱と矛盾が生じているのです。

神社とは、その地域の支配者（部族国家の王）の祖廟として造られたものであり、その各々の国の王は、大国主を盟主とする連合の傘下に入った後には、直接の国の支配者である王の祖廟の他に、連合全体の支配者（大王）として大国主も祀ったようです。大国主を祀る神社は各地にたくさんありますが、大国主を祀っている地域は、大国主を盟主とする連合に加わっていた国だったと考えられます。そうであれば、「大国主の国・葦原中国を攻め滅ぼした九州統一王朝」のあった九州には、大国主を祀る神社はないのではないかと考え、『諸国一の宮』を調べてみたところ、オオナムチを祀る「日向国一の宮」の都農の神社以外には九州の一の宮に大国主を合わせ祀る神社はやはりありませんでした。天津族の傘下にあった九州各地の「一の宮」は、応神天皇や神功皇后や天津族の神（支配者）を祀っているのです。

第二章 大国主とその五つの名前とは？

二 一人ではなかった大国主

・・・・これらのことから大国主とは一人ではなかったのではないかと考えられます。一人が四つの別名を持っていたのではなく、名前だけ大国主がいたのではないのでしょうか。それなら何人もの女性に求婚し結婚したことにも、何度も死んでいることにも何の矛盾もなく、出雲神話は「荒唐無稽なお話」ではなくなるのです。『古事記』は、出雲で国譲りをさせられたのは「スサノオの六世の孫の大国主」だと記しています。そして、実際に「ヤマトの出雲」で東征してきた天津族に殺され国を奪われた葦原中国の最後の王の名前は「ナガスネビコ」です（本名ではないかもしれませんが『古事記』はそう記しています）。それでは「国譲りをさせられたスサノオの六世の孫である大国主」とは、ナガスネビコだということになります。六世の孫がナガスネビコであるならば、オオナムチ・アシハラシコオ・ヤチホコ・ウツシクニタマとは、ナガスネビコ以前のスサノオの子孫である代々の五人の大国主の名前なのではない

か、そう考えて『古事記』を読み直してみると、面白いことが分かってきました。やはり『古事記』は荒唐無稽な「お話」に仕立てて混乱させながら、歴史を記していたのです。

『古事記』は、ヤマタノオロチを退治したスサノオがクシナダヒメと結婚して須賀に宮を造つ暗い夜に男女の営みをしてお生みになった神の名は……」（梅原猛訳・『古事記』より）と始まる文に、訳の分からない長々しい文字を連ねた神の名前を延々と記しています。よく分からないし、その名前にはあまり意味はなさそうに思いましたが、この名前や文字に何かヒントがあるかもしれないと考えて、読み直してみると、そこにはスサノオから六世の孫までの系図が記されていました。まさしく大国主神がスサノオから六代目の子孫で、六世の孫となっています。それでは、この**オオクニヌシノカミ**と記された六代目の子孫が**天津族に殺され国を奪われた最後の大国主・ナガスネビコ**だということになります。

諏訪の手長神社の伝承は、スサノオとクシナダヒメの子は「タケミナカタA」だと伝えていました。それではこの系譜の一代目のスサノオの子孫・ヤシマジヌミノカミが「タケミナカタA」であるということになります。「タケミナカタA」は、確かにスサノオが傘下に入れた出雲周辺の支配地にブ諏訪や佐久やかみつけやしもつけなど近江以東の多くの国を加え、諏訪で多くの王の上に立つ大国主になっていました。それでは、「ヤシマジヌミノカミ（＝タケミナカタA）が初代の大国主だったのでしょうか。そこで、この系譜と大国主の別名を対応させてみると

一代目大国主は	ヤシマジヌミノカミ～……………タケミナカタA
二代目大国主は	フワノモジクヌスヌノカミ……………オオナムチノカミ
三代目大国主は	フカブチノミズヤレハナノカミ……アシハラシコオノカミ
四代目大国主は	オミズヌノカミ……………ウツシクニタマノカミ
五代目大国主は	アメノフユキヌノカミ……………ヤチホコノカミ
六代目大国主は	オオクニヌシノカミ…………… ナガスネビコ

となります。

これを念頭に置いて『古事記』の大国主の物語を読み直してみると、出雲神話はスサノオからいきなり六世の孫の話に飛んでしまっているのではなく、順番を追って書いてあることが分かりました。

三 『古事記』の大国主の物語

『古事記』の大国主の物語は、別名とされる四つの名前のそれぞれを主人公とする、四つの物語で構成されていたのです。

① 「因幡の素兎しろさぎ」で、大国主は八十神と共に因幡のヤガミヒメに求婚に出かけるが、ヤガミヒメを手に入れたのは大国主であり、この時の大国主は「オオナムチノカミ」という名前である。オオナムチはこの後怒った兄弟の八十神たちに殺されてしまうが、母神のサシクニワカヒメがオオナムチを甦らせて、木の国へ行かせる。木の国へ行ったオオナムチを八十神が追いかけてきて殺そうとしたので、オオナムチはさらに木の国からその隣にあった根の堅州国のスサノオの元へ行く。

② 根の堅州国へやって来たオオナムチを見たスサノオは、「これはアシハラシコオノミコトだ」と言う（ここで木の国から根の堅州国に行った大国主はアシハラシコオになっている）。

③ 根の堅州国で、スサノオのさまざまな試練を経て、アシハラシコオはスセリヒメを連れて根の堅州国から逃げ出す。追ってきたスサノオは逃げていくアシハラシコオに向かって「スセリヒメを正妻にして、兄弟を殺し、葦原中国を支配する大国主となってウツシクニタマノカミと名乗れ」と言う（ここで根の堅州国から戻ったアシハラシコオは、葦原中国を支配する大国主のウツシクニタマになっている）。

④ 葦原中国の王となったヤチホコノカミは、越の国のヌナカワヒメに求婚しに出かけていく（この時、大国主・ウツシクニタマは、ヤチホコノカミになっている）。

つまり出雲神話の大国主の物語は「大国主」という名前の一人の主人公の物語ではなく、四つの別々の物語であり、それぞれの話にそれぞれ名前の違う主人公がいるのです。『古事記』は大国主という一人の人間の物語に見せかけなが

ら、名前を変えて書くことでそれぞれの代の大国主の歴史を記していたのです。初代大国主・ヤシマジヌミを、『古事記』はタケミカヅチに負けて一生諏訪に閉じ込められた「タケミナカタA」として隠しました。ですから、大国主の物語は二代目の大国主・オオナムチから始まる形になっています。そして、**最後の大国主・ナガスネビコ**は、**国譲り**をした「**六世の孫の大国主**」として**大国主の物語からは隠し、「国譲り神話」と「神武の東征」とにその歴史を記しています**。それでは、『古事記』が出雲神話として記した六大の人国主の歴史とはどんな歴史だったのか、『古事記』の記述と実際の歴史を関連づけて考えてみましょう。

第一三章 六人の大国主

六 六代目大国主・ナガスネビコとその息子・事代主と建御名方（タケミナカタB）

この**六代目大国主のナガスネビコ**と天津族の戦いは、『古事記』には大国主の物語ではなく、「神武の東征神話」として記されています。神武（実際は崇神）は、兄（五瀬命）をその戦いで失うほどの激しい戦いの末、天津族側に寝返ったナガスネビコの息子・事代主（＝ヤタガラス＝カモノタケツヌミノミコト）の手引きで大和へ迫り、**大国主・ナガスネビコ**は、金の鳶とびに目がくらんだ（買収された）側近と、ウマシマジノミコトによって殺されて葦原中国の**最後（結び）の大国主**となってしまったのです。このウマシマジノミコトとは、ナガスネビコの娘三炊屋姫みかしきやひめと、前もって天津族から天磐船で葦原中国に送り込まれていたニギハヤヒの間に生まれた子であり、ナガスネビコの孫なのです。この結びの大国主となってしまった**ナガスネビコ**は、結び大神（夫須美ふすみ大神）として**征服者・天津族の造った紀伊の熊野大社と、大和の大神おおみわ神社の摂社・神宝かんだから神社に、また、国懸くにかかす（国欠かす）大神として天津族が元の場所から移動させ、名前まで変えてしまった紀伊国一の宮の国懸神宮に正体を隠された形で祀られています**。

大和国一の宮の大神神社は、大物主神とオオナムチノカミを祭神としていますが、大物主とは大国主のことですから、**大神神社は大国主を祀る神社**なのです。この神社は、崇神の時代に、大物主の崇り（征服された出雲族の反乱）を抑えるために造られ、大国主の子孫・オオタタネコを捜し出してきて祭主にした神社であり、ヤマトの支配者だった大国主を祀っているから、大和国の一の宮になっているのです。**祭神を大国主ではなく大物主としたのは出雲とヤマトの関係や「ヤマト（葦原中国）の支配者だった大国主」の存在や大国主とオオタタネコの間を隠すため**のようです。現在この神社は、「本殿を持たず三輪山をご神体として祀っている」とされていますが、これはもともと拝殿としてではなく、大国主を祀る本殿として造られたものでしょう。造られたのは崇神の時代ですから五世紀の初めであり、山をご神体とするとされている諏訪大社と同じように、拝殿と本殿という神社形式ができる以前の、祖廟としての古い形なのです。けれど、年に一度だけ三ツ鳥居が開かれるという繞道祭にようどうさいの参拝の順序から推測すると、この大神神社で大国主の子孫が最も重要視し本当に祀ってきたのは、本殿の祭神としている大物主ではなく、このお祭りで最初に参拝する本殿の囲いの外にある摂社・神宝神社であって、ここに祀られている祭神は、「家都御子けつみこ大神」「夫須美ふすみ大神」とその御子神である「速玉大神」なのです。家都御子大神とは「欠御子」すなわち子孫を滅ぼされたスサノオであり、「夫須美大神」とは「結びの神」で**最後の大国主・ナガスネビコ**であり、その御子神とは、東征時に父と共に殺された「タケミナカタB」のことでしょう。天津族が殺し、国を奪った出雲族の大国主を祀らせるために、崇神天皇は大神神社を造り、大物主（大国主）の子孫であるオオタタネコを祭主としたのです。また、「崇神天皇が子孫を捜し出して祀らせた」ということの意味は、気持ちや儀式のことではなく、王を殺され、すべてを奪われた出雲族の報復や反乱を抑えるために、神社領として土地や費用を与えたという経済対策でしょう。この出雲族の反乱やそれに対する経済的な対策を、『古事記』は「崇神の御世に疫病や反乱が続いたのを、大和の人々は三輪山の神の崇りだと恐れ、崇神の夢枕に立った大物主神のお告げによって、子孫のオオタタネコを捜し出して大物主を祀らせたところ、疫病はやんだ」という形で記したのです。

<この文書は、「**生駒の神話**」（下記 URL をクリック）に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>